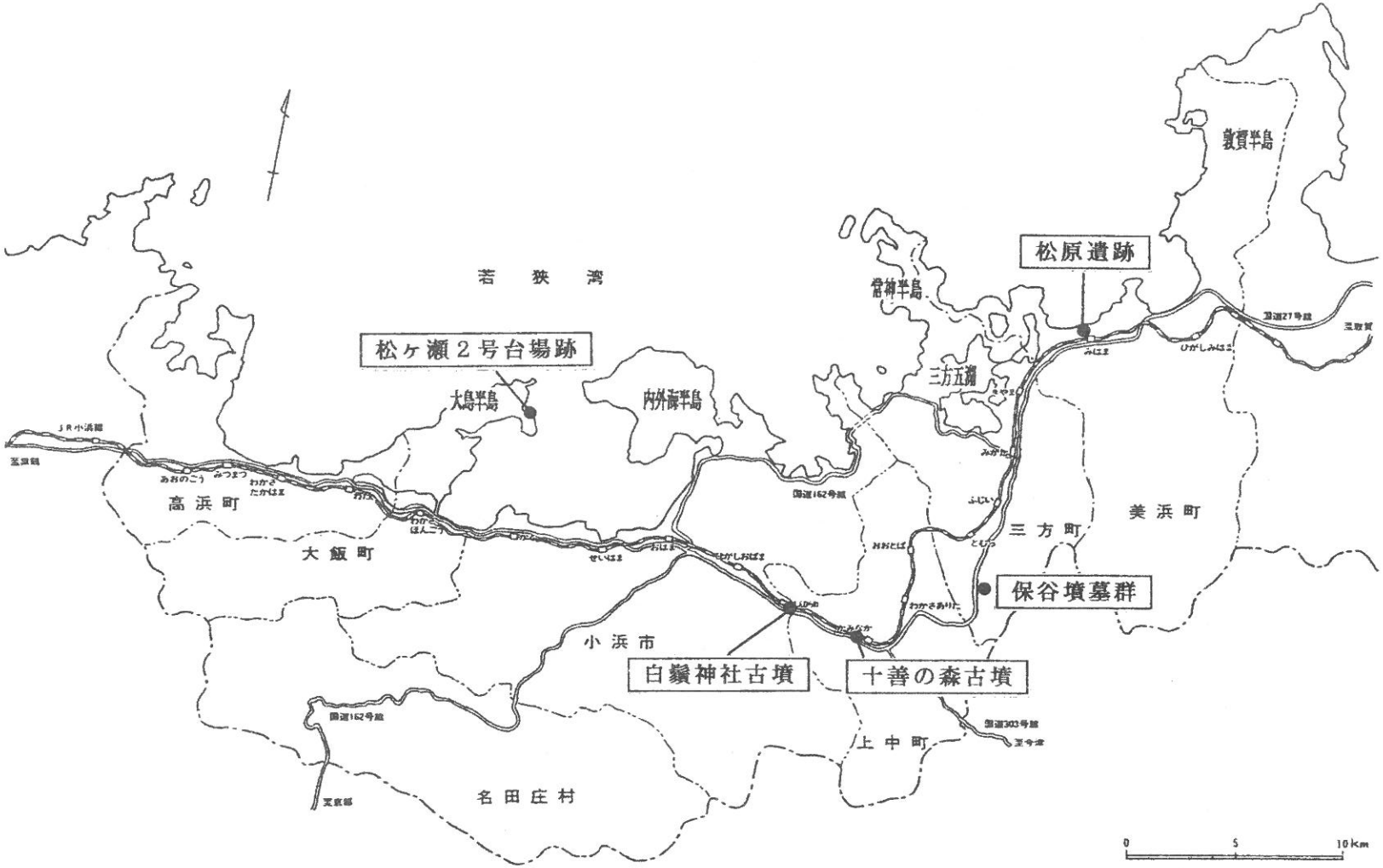
平成７年度郷土史講座資料

平成６・７年度

若狭地域における発掘調査の成果

平成８年３月17日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館


若狭湾
敦賀半島
松原遺跡
常神半島
松ヶ瀬2号台場跡
大島半島
内外海半島
三方五湖
高浜町
大飯町
小浜市
三方町
美浜町
保谷墳墓群
白鬚神社古墳
十善の森古墳
上中町
名田庄村
0
5
10km

遺　跡　位　置　図

松　原　遺　跡

所　在　地　福井県三方郡美浜町松原７号塩風除
調査原因　全天候型多目的広場の建設に伴う事前調査
調査期間　平成６年11月15日～平成６年12月27日
調査主体　美浜町教育委員会
調査担当　網谷克彦（敦賀女子短期大学）　森本克行（美浜町教育委員会）
時　　代　古墳時代

調査の概要

耳川河口部西側には２列の砂丘が南北に並び、うち内陸よりの南砂丘上に遺跡が立地する（図１）。沿岸の北砂丘上には遺跡は確認されておらず、北砂丘の形成は奈良時代以降の比較的新しいものと思われる。

調査は平成６年６月の試掘調査の結果に基づき、建物北縁基礎工事がかかる遺跡南辺の東半を対象とし、東西47ｍ、南北７ｍの範囲で実施した。多量の製塩土器を混在する表層２層の砂を除去後、調査区の中央部から西で標高 7.5ｍ前後に遺構面を検出した（図２）。

検出した遺構は敷石炉２基、土器溜（濃密）７基、配石帯１基と、これに土製模造品が集中して出土した地点とからなる（図３）。敷石炉は偏平な円礫を敷き並べたもので、円礫の多くが加熱を受けて赤変していた（図４）。検出しえた炉形態は不整形で、かつ１基は礫が散在しており、原形およびその規模は推定しえない。敷石炉２基は遺構分布の東端にあり、これに付随すると思われる土器溜は、その西隣の土器溜１が考えられる。海岸線に対して土器溜が炉の背後に位置せず横並びに隣あう位置関係や、土器溜が不規則に分散することなどは、操業単位の個別性を想起させ、小浜市や大飯郡のおよそ前後の時期に相当する遺跡とは異なる状況を呈する。

土器溜１に一部が重複して、その下層より出土した土製模造品は（図２サブトレンチＥセクション）、整理途中の現時点で、鏡15・勾玉21・管玉５・釧？10・短甲２・土器60以上を数える。それぞれ一時期の所産とは考えにくい程の多様な形態を含む。分布の上では３小群に区分できるが、うち１群については製塩土器に入れて埋められたものが散乱したと推定できる状態にある。よって、土器溜１との層位の上下関係を即座に時期差とみなすことはできないとしても、製塩場として稼働する以前に祭祀の場として機能した可能性も考慮されねばならない。土製模造品の種類、著しい形態差、容器となった製塩土器の年代などが整合的に説明されねばならない。土器溜は多量の製塩土器片にごく少量の土師器・須恵器を含む。

製塩土器については整理作業を始めたばかりで報告できる状況にないが、土師質を主体に須恵質を含み、平底底部の立ち上がりが丸い、比較的大型の土器を主とするものであろう。共伴した須恵器には甕・蓋杯・器台底部片があり、大多数はＴＫ 217型式に相当するものである。製塩遺構に関してはおおよそ７世紀前半に属し、昭和53年の試掘調査で示された年代観は修正されねばならない。　（網谷克彦）

※福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『第10回発掘調査報告会資料』1995年 より転載

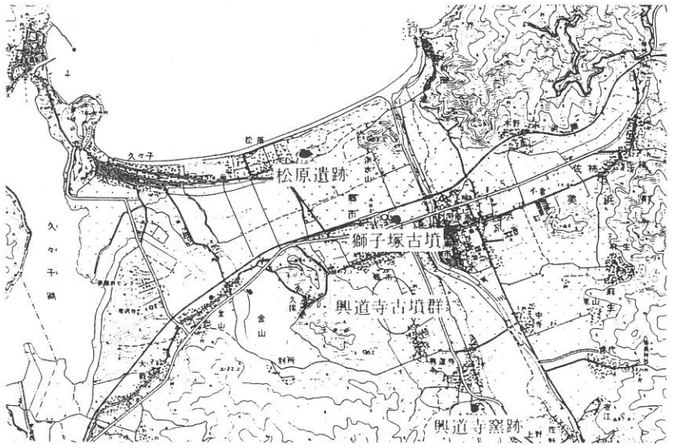
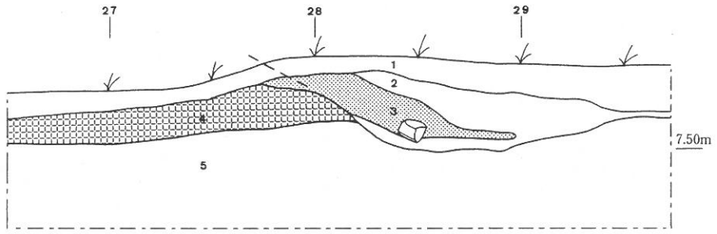
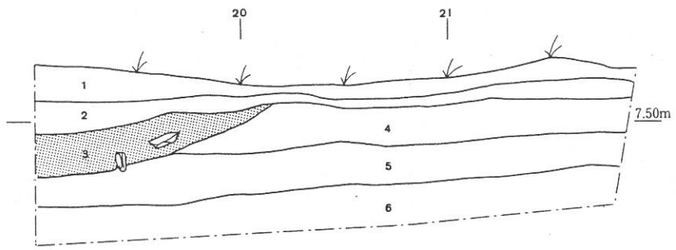


図１　松原遺跡の位置と周辺の地形（S＝1/50000）



発掘区北壁サブトレンチＥの層位

1. 表土(暗褐色粗砂)　2. 黒～暗褐色粗砂(有機物を多量に含む)　3. 土器溜1(赤～黒褐色粗砂を混在)
4. 黄灰色粗砂(土製模造品を包含する層)　5. 灰色粗砂



発掘区北壁サブトレンチＤの層位

1. 表土(有機物混じり粗砂)　2. 暗褐色粗砂　3. 土器溜2･5(暗～黒褐色粗砂)
4. 暗黄色粗砂　5. 黄黒色粗砂　6. 灰黒色粗砂

0　1 m

図２　層位

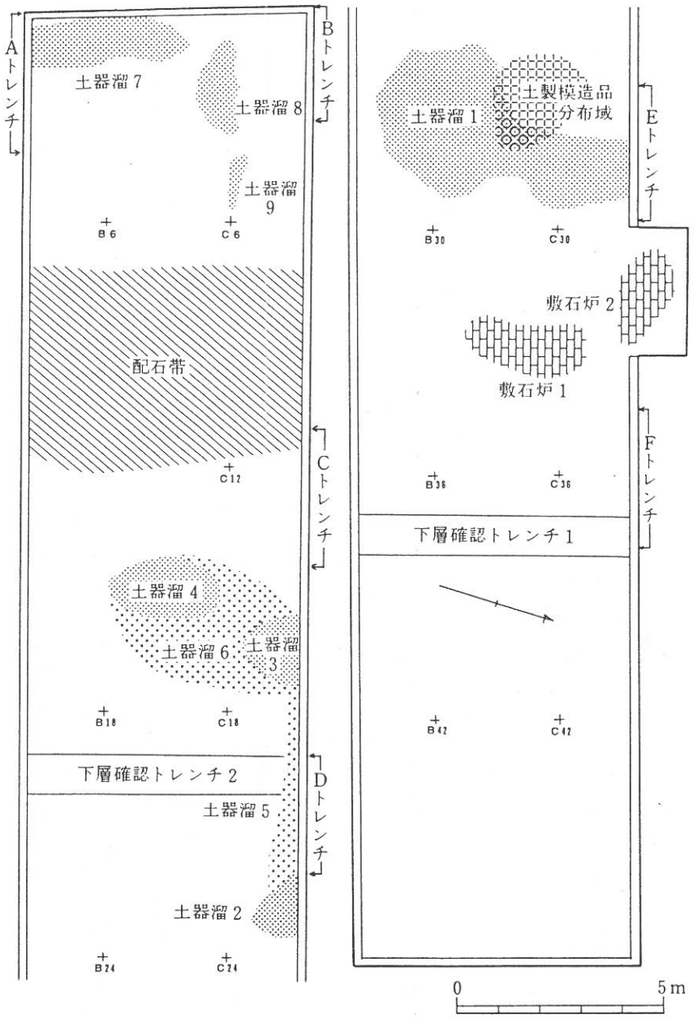


図３　遺構配置図

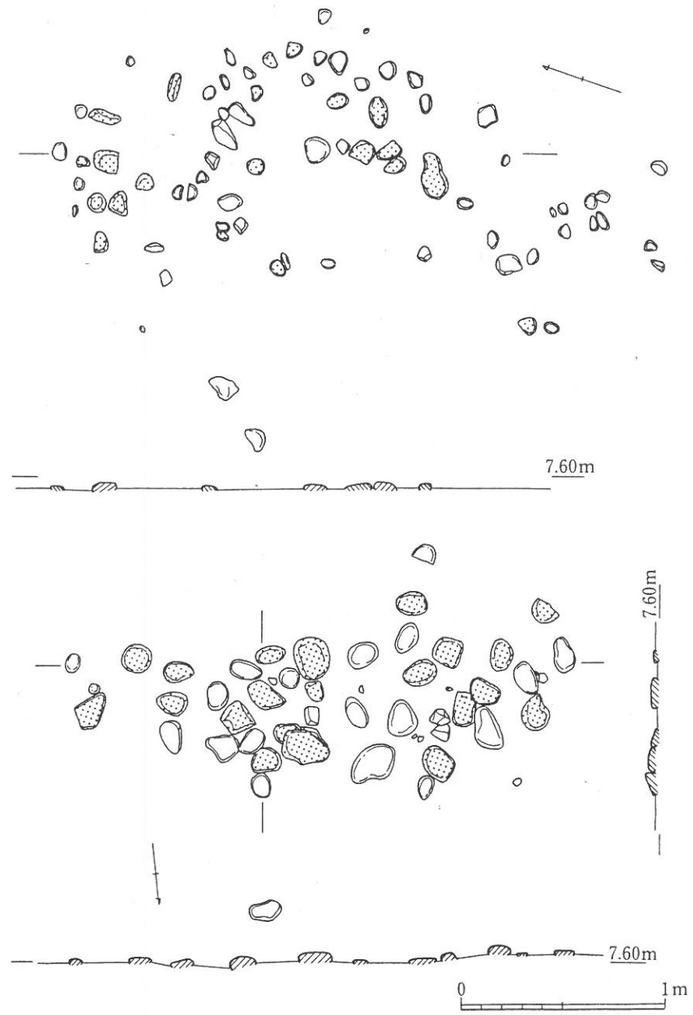


図４　敷石炉実測図（上：敷石炉１，下：敷石炉２）

保　谷　墳　墓　群

所　在　地　福井県三方郡三方町倉見71号保谷10、13番地
調査原因　県営ふるさと農道緊急整備事業　山林切り通し
調査期間　平成６年８月23日～平成７年３月31日
調査主体　三方町教育委員会
調査担当　三方町立郷土資料館　田辺常博　青池晴彦
時　　代　中　世

調査の概要

発掘調査は、県営ふるさと農道緊急整備事業の山林切り通し工事の調査対象区域となる１号・２号墳墓が分布する山林の尾根及びその西側斜面に５ｍメッシュの杭を打ち、地区設定を行うことから実施した。なお尾根より東側の斜面は、瓦製造の土取りのために地形が広範囲にわたり改変されていた。

１号墳墓は調査前から墳丘東側を土取りにより半壊していたが、墳長が南北7.0ｍ、東西4.0ｍ、高さが1.0ｍあまりと低い隅丸方形状のマウンドが現存していた。墳頂部の平坦面には一辺が30～50㎝の山石を環状に配列した１段の石組の半分（南北1.8ｍ、東西0.8ｍ）が現存し、その石組内部の上面から擂鉢及び土師器の破片が出土した。擂鉢が蔵骨器の蓋に転用されていたことも考えられるが、焼き物蔵骨器は確認されていない。

２号墳墓は、１号墳墓の南35ｍの尾根上に築造された一辺が40～60㎝の山石の石列を二重に巡らし、基壇状に方形を呈した石組である。墳墓の東斜面は１号墳墓同様に土取りにより削られていたが、幸いに土取りによる影響が少なく原形を残していた。石列長は外側が東西4.8ｍ、南北4.4ｍ、内側が東西2.7ｍ、南北2.4ｍを計測し、東西方向が南北方向に比較しやや長く石組みされている。外側の石列から墳頂までの高さは最高所で 0.9ｍあまりと低平である。石列は一部に抜き取りや落下がみられるが、外側が１段、内側が２段積みされている。内側石列内の墳頂の平坦部が蔵骨器等の埋納箇所に想定され、全面発掘を行ったが、蔵骨器および埋納施設の掘り込み等の痕跡は確認されず、築造時期を示す遺物等の出土もみられなかった。

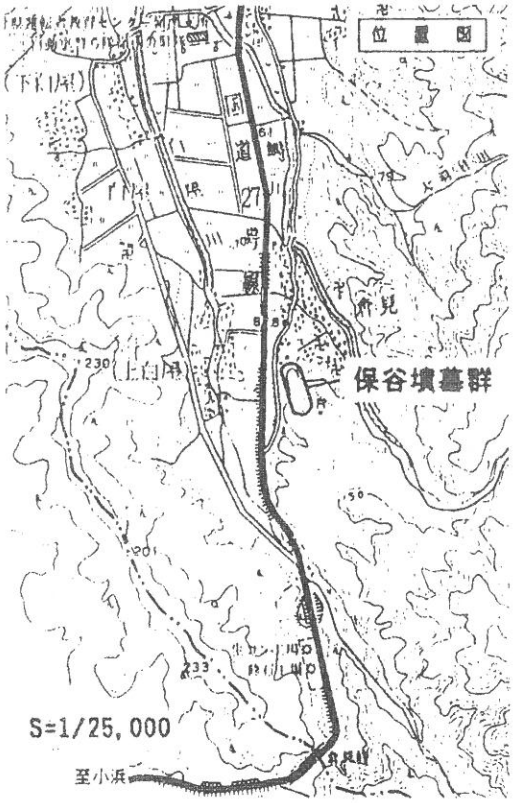
なお、２号墳墓と同様の石列を二重に巡らせた方形石組墳墓の類例は少ないが、富山県福光町の香城寺惣堂遺跡南墳墓群の６号墳の築造時期が鎌倉時代とされている（宇野隆夫ほか　医王山文化調査書『医王は語る』富山県福光町 平成５年）。しかし２号墳墓の築造時期については時期を示す遺物の出土がみられなかったことから、中世墳墓としてとらえておきたい。

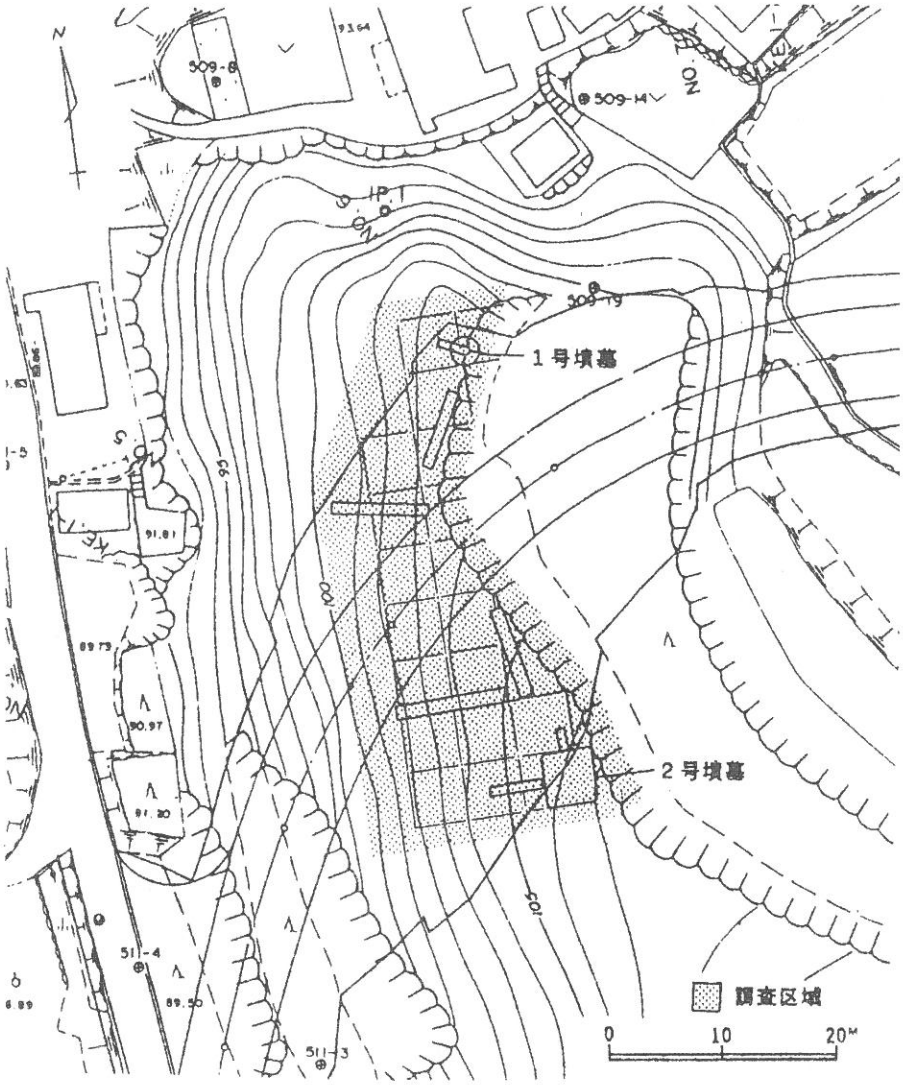
尾根や斜面に設定した遺構面の確認トレンチの調査では、何らかの施設も検出されなかった。

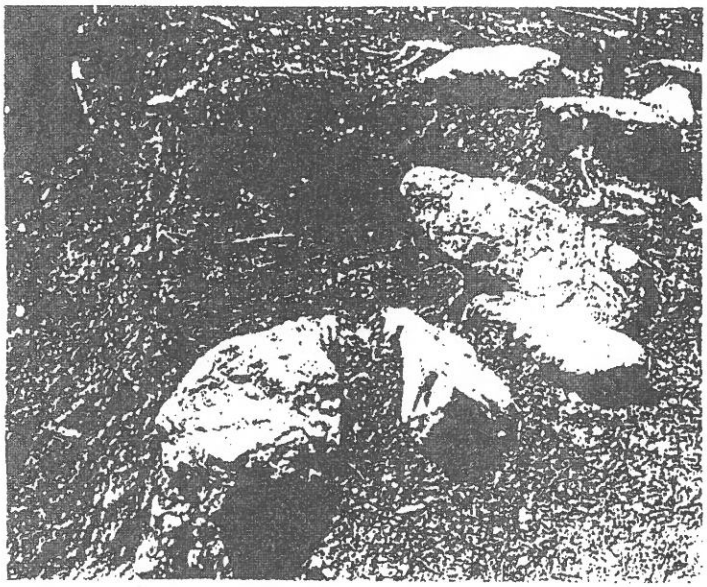
なお発掘調査着工前においては、遺跡の性格が外形の状況から古墳時代後期～終末期の古墳群と考えていたが、中世から近世にかけての墳墓群と確認されたので、遺跡名を保谷墳墓群と訂正した。

（田辺常博）

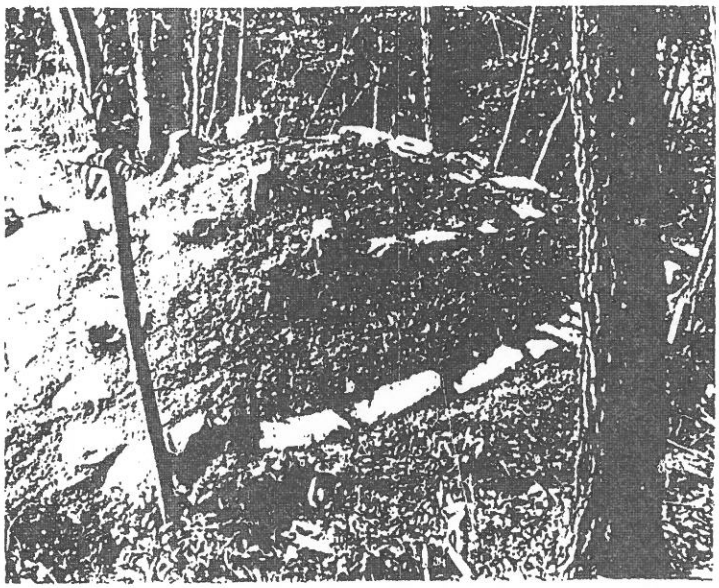
※福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『第10回発掘調査報告会資料』1995年 より転載





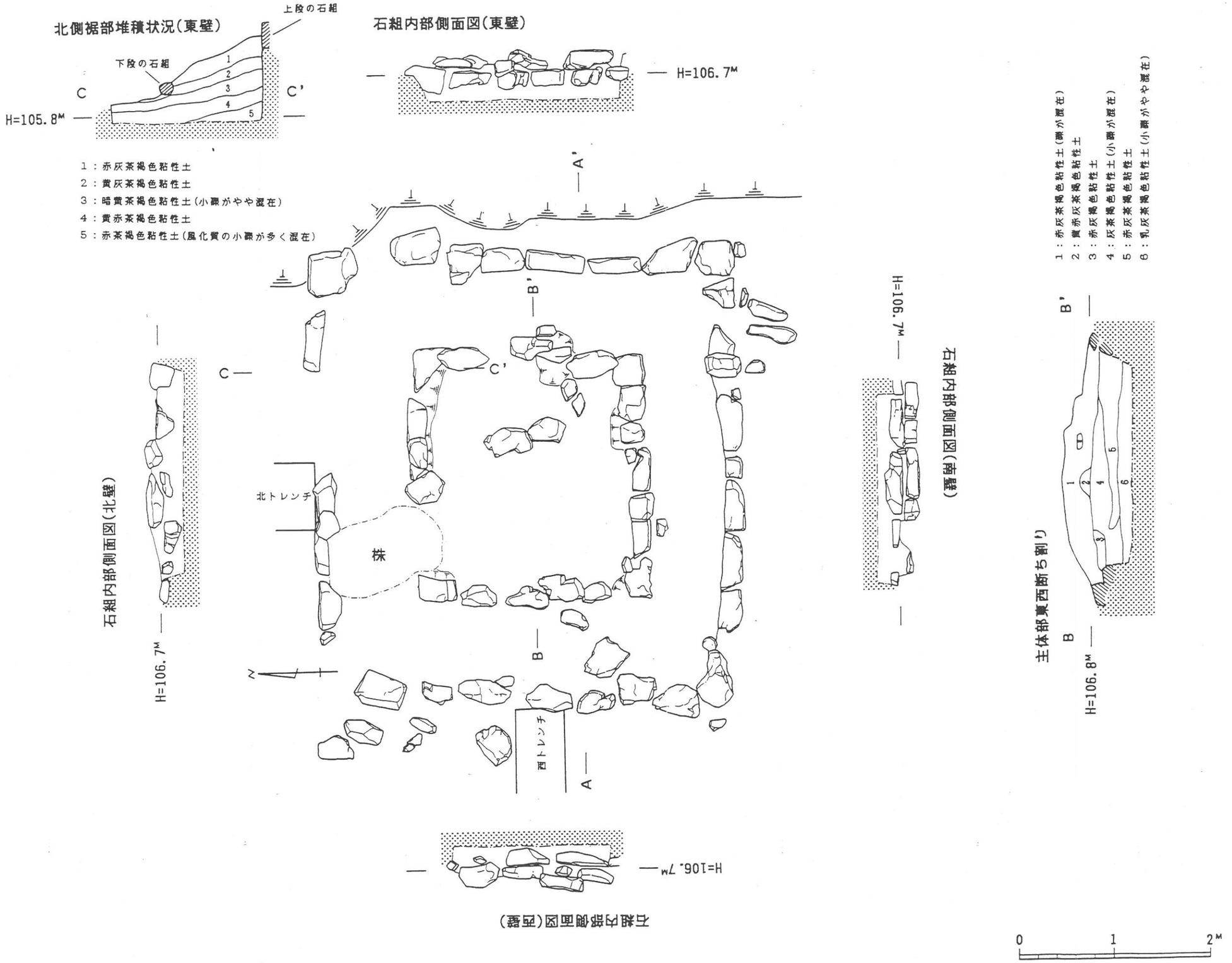


1号墳墓　石組内部の掘り下げ状況



2号墳墓　方形石組墳墓の全景（南方向から）

＜２号墳墓＞


北側裾部堆積状況（東壁）
上段の石組
下段の石組
C
C'
H=105.8M
1
2
3
4
5
1：赤灰茶褐色粘性土
2：黄灰茶褐色粘性土
3：暗黄茶褐色粘性土（小礫がやや混在）
4：黄赤茶褐色粘性土
5：赤茶褐色粘性土（風化質の小礫が多く混在）
石組内部側面図（東壁）
H=106.7M
A'
B'
C'
C
北トレンチ
棺
B
A
西トレンチ
N
石組内部側面図（北壁）
H=106.7M
石組内部側面図（西壁）
H=106.7M
石組内部側面図（南壁）
H=106.7M
1：赤灰茶褐色粘性土（礫が混在）
2：黄赤灰茶褐色粘性土
3：赤灰褐色粘性土
4：灰茶褐色粘性土（小礫が混在）
5：赤灰茶褐色粘性土
6：乳灰茶褐色粘性土（小礫がやや混在）
主体部東西断ち割り
B'
B
H=106.8M
A'
A
H=106.0M
0
1
2M

十善の森古墳

所　在　地　福井県遠敷郡上中町天徳寺20-1、5
調査原因　交差点改良工事に伴う事前調査
調査期間　平成6年5月18日～平成8年3月31日
調査主体　上中町教育委員会
調査担当　上中町教育委員会　永江寿夫　松宮登志次
時　　代　古墳時代後期

調査の概要

現在、当古墳の南側に接して国道が通っているが、明治の地籍図においては南側に旧街道が通り、その外側に周濠が存在したことはある程度予想できたが、今回の調査で、確実に周濠の存在が確認された。また、調査区域が後円部の石室の開口部側ということもあり、多数の円筒埴輪片を採集することが出来た。

調査結果

1．主軸をほぼ東西にする当古墳において山側の南側にも存在して濠が巡ることが確認された。但し、脇袋古墳群の西塚古墳や上ノ塚古墳に見られるような、周濠内法の葺石は確認されなかった。

周濠内の埋土が有機質をよく含んでいるため、常時周濠内に水が湛えられていたと考えられる。

周濠巾については、国道と古墳が接しているため確認できない。

2．周濠の形態であるが、外周が後円部側からくびれに向かうように湾曲し、所謂定型的な盾形周濠ではないと思われる。また、前期古墳に見られるような、周濠に水を湛えるための堰堤の存在の可能性も指摘できるが、とにかくこの時期の古墳としては、このような形状の周濠を持つものは、他に例を見いだせないのではないかと思われる。

なお、遺構が国道下へ続くため、現在のところその全体的性格付けは不可能である。

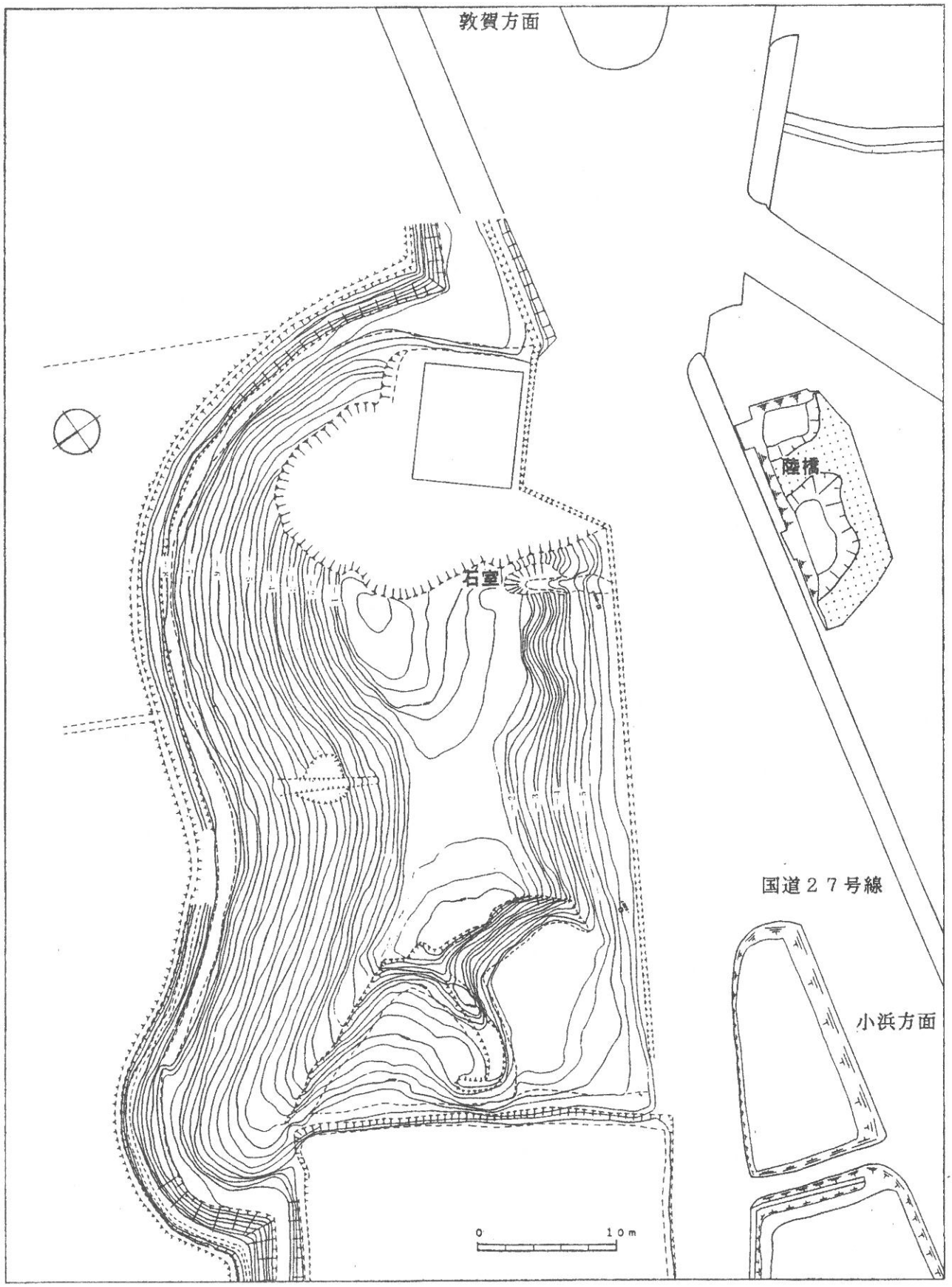
3．周濠内に、横穴式石室に向かうような陸橋を確認出来た。幅は、上面幅約3.2m、底部約4.3mを測る。

4．出土遺物については、調査地点が石室に向かう陸橋部周辺ということから、埴輪がコンテナ約15杯ほど採集された。検出状況から、周濠の外側に樹立していたものと思われるが、後代の削平などにより、その元位置を確認することは出来なかった。そのほとんどが円筒埴輪であるが、川西編年第Ⅴ期に帰属し、朝顔形埴輪が若干混じる。

また、斜格子状の文様を持つ盾形の形象埴輪の破片(同一固体)を検出した。

5．その他、石斧や石包丁と思われる石器を周濠内の埋土から検出することが出来た。これには、縄文後晩期や弥生終末に帰属する土器片が何点か検出され、従来より当古墳周辺には該期の遺跡が存在することが予想されていたが、そのことを更に裏付けるものと思われる。

（永江寿夫）



十善の森古墳周濠部調査位置図

白鬚神社古墳

所　在　地　福井県小浜市平野
調査原因　若狭地方の主要前方後円墳総合調査
調査期間　平成７年９月５日～平成８年３月31日
調査主体　福井県教育委員会
調査担当　福井県立若狭歴史民俗資料館　畠中清隆
時　　代　古墳時代後期

調査の概要

上中町から小浜市東部にかけての北川流域には、若狭地方の主要な前方後円墳が集中して造られている。今回調査した白鬚神社古墳もそのうちの一つで、小浜市東部の平野集落がある小扇状地の末端に主軸を東西にとり、前方部を西に向けて造られている。

この総合調査の主たる目的は、古墳の規模や範囲を確認することにあり、本古墳についても墳丘の規模と周濠の外周を確認することを目的として調査を実施した。また、これまで埴輪など築造時期を特定できる資料がなく、これらの良好な資料をえることにも努めた。

墳丘の規模確認のために設定した第１・３・５・７・９・11・12の各トレンチでは、墳丘斜面と周濠底を検出した。また、量的には多くはないが、周濠内では崩落した埴輪や須恵器の外に葺石と思われる拳大から人頭大の河原石を確認した。しかし、検出した墳丘斜面での葺石の存在は確認できず、下段には葺石は葺かれていなかったものと思われる。古墳の規模を推定するにあたっての墳丘裾は、墳丘の傾斜が緩くなり周濠底へと移るところとした。

周濠の外周確認のために設定した第２・４・８・10の各トレンチでは、外周の肩及び周濠底に向かって傾斜する斜面を検出した。第６トレンチにおいては、南側に集落道が通っいるため肩の確認はできなかった。検出した外周肩は北側が南側より約２ｍ低くなっている。これは元の地形をそのまま利用していることによるものと思われる。また、周濠底についても南側はほぼ同一レベルであるが、北側は約１ｍ低くなっている。周濠全面に水を湛えるには堤のようなものが必要と思われる。前方部側の第１トレンチと第２トレンチにおいて、古墳の主軸に沿って幅約１ｍ、高さ約40㎝の陸橋のような高まりが地山を削り出して造られているのを確認した。これがその機能を果たしていた可能性もある。外周確認のためのいずれのレンチにおいても、少量ではあるが埴輪が出土しており、周濠外周にも埴輪が立っていたものと思われる。なお、葺石は周濠内に崩落したものも確認していない。

調査の結果、古墳の周りには盾形の周濠が巡ることを明確にすることができた。その幅は周濠底で約12ｍが推測できる。墳丘の規模は全長約58ｍ、後円部径約38ｍ、前方部幅約43ｍが推定でき、前方部が広がる十善の森古墳や上船塚古墳に類似した墳形が考えられる。

出土遺物については十分な整理ができていないので、大まかではあるが、大半を占める円筒埴輪は川西編年の第Ｖ期に属し、十善の森古墳の埴輪によく似ているように思われる。須恵器については、第５トレンチから脚付四連壺、装飾付脚付子持壺、甕のそれぞれ一部と、第９トレンチから杯片が出土している。このうち第５トレンチの須恵器は周濠底近くから出土しており、古墳築造時に墳頂部で使われたものが崩落したものと思われる。須恵器の所属時期は特殊な器形が作られ始める６世紀初め頃が考えられ、墳形や埴輪の時期をも含めて考えると、本古墳の築造時期は 500年前後とされている十善の森古墳からこれに後続する上船塚古墳までの間と思われる。

（畠中清隆）

白鬚神社古墳調査位置図

松ヶ瀬２号台場跡

所　在　地　福井県大飯郡大飯町赤礁
調査原因　遺跡の範囲内容確認調査
調査期間　平成６年９月26日～平成７年３月31日
調査主体　大飯町教育委員会
調査担当　大飯町立郷土史料館　田中栄一
時　　代　近　世

調査の概要

〈遺跡の位置と調査の経過〉　福井県の西端、大飯郡の東部に大飯町が位置し、その北部に大島半島が所在している。大島半島は小浜湾の北西にあたり、湾内の出入口にある。酒井家編年史料稿本によると、以前から大島半島に砲台場が造営されていたことは判明していたが、現地での確認はされていなかった。平成２年10月30日、若狭歴史民俗資料館の現地調査によって発見され、平成６年度から大島半島における台場跡の範囲内容確認調査を開始することなったのである。今回は中でも、規模が大きく西洋式台場跡である松ヶ瀬２号台場跡について発掘調査を実施した。

〈検出遺構〉　松ヶ瀬２号台場跡の外周は、高さが2.2～2.5ｍの土塁となっており、中央部分がやや高い。内側は、半円形砲座を中心に左右に各２個の長方形砲座が配置されている。砲座と砲座の間には、幅80㎝、長さが７ｍ（半円形砲座の両サイドは長さ１０ｍ）程の武者走りがある。武者走りから、一段下がって平場となる。

中央部分の半円形砲座（３号砲座）の底辺部分（北東側部分）の長さは13.2ｍ、半径は5.8ｍである。平場より約40㎝高く、砲座の外周は２～３段の石積みとなっている。南側、西側部分にはそれぞれ入口があり、西側入口部分には砲座への階段がつけられている。砲座の内側部分を約30㎝掘り下げると、３～４列に配列された敷石が検出された。10～40㎝内外の石が敷きつめられており、上面は平坦である。全面がほぼ同一レベルであり、この敷石は90°範囲に回転する砲台の基礎と推定される。

２・４号砲座は長さ５ｍ、幅４ｍの長方形を形成し、平場より約40㎝高く、上面には砲台の基礎と思われる敷石が一部配列されている。

土塁の西・南端部分は一段高く盛土されている。西端部分の南西側には幅が約１ｍ程の入口があり２～３ｍ入ると左へ屈折している。入口から左側の側壁は石積みで高さ１ｍ内である。石積みの上部は石灰・赤土・ニガリを混ぜたベトン状の壁となっている。

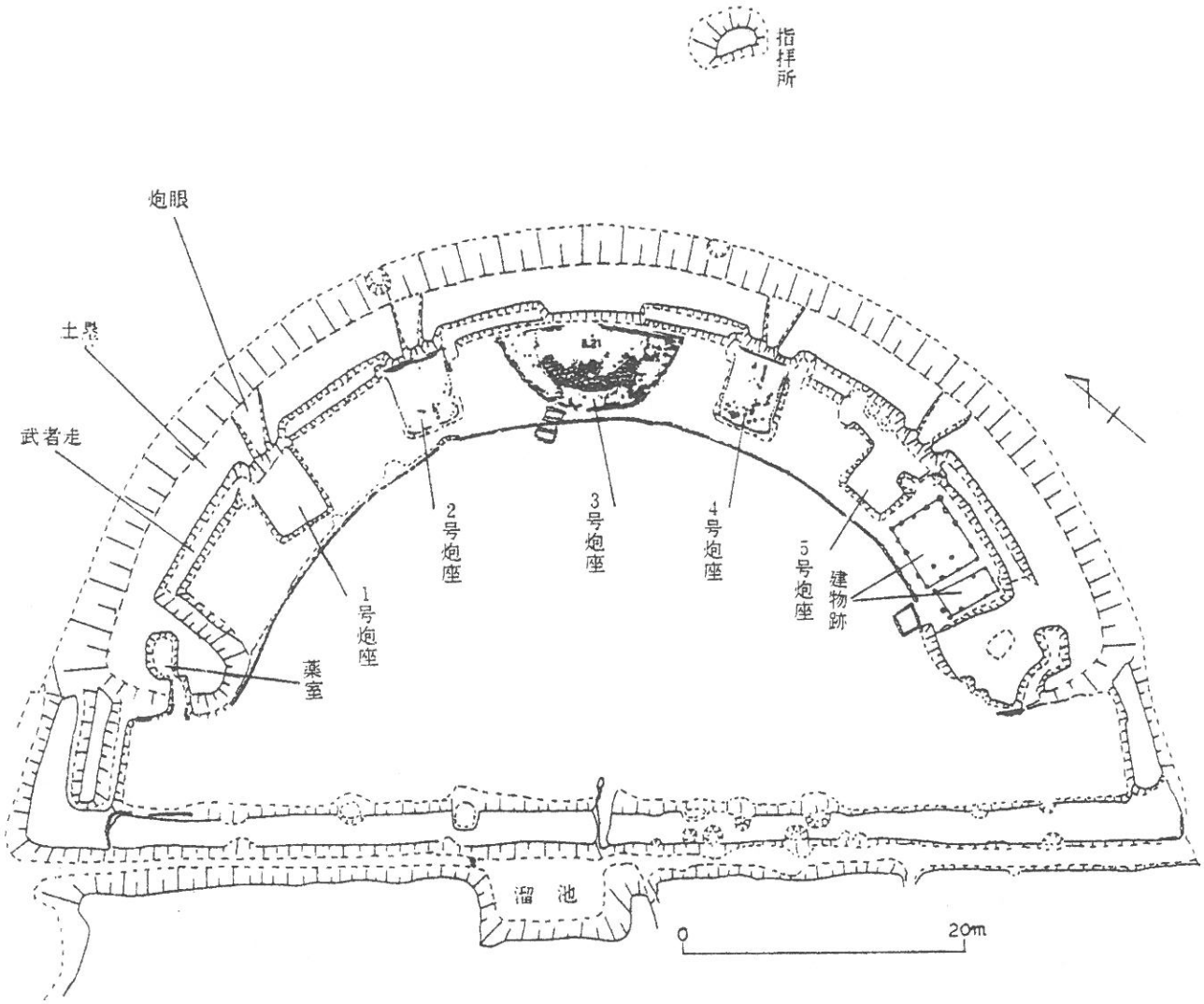
〈まとめ〉　今回発掘調査した２号台場跡は半円形に配置した土塁によって造営されている。石積みの石垣台場跡ではない。土で盛られた土塁は、敵弾が炸裂した際、極力被害を抑える効果があったと考えられる。

中央部の３号砲座の敷石の内側には黒色土が混入しており、さらに落ち込むことは確実と思われる。

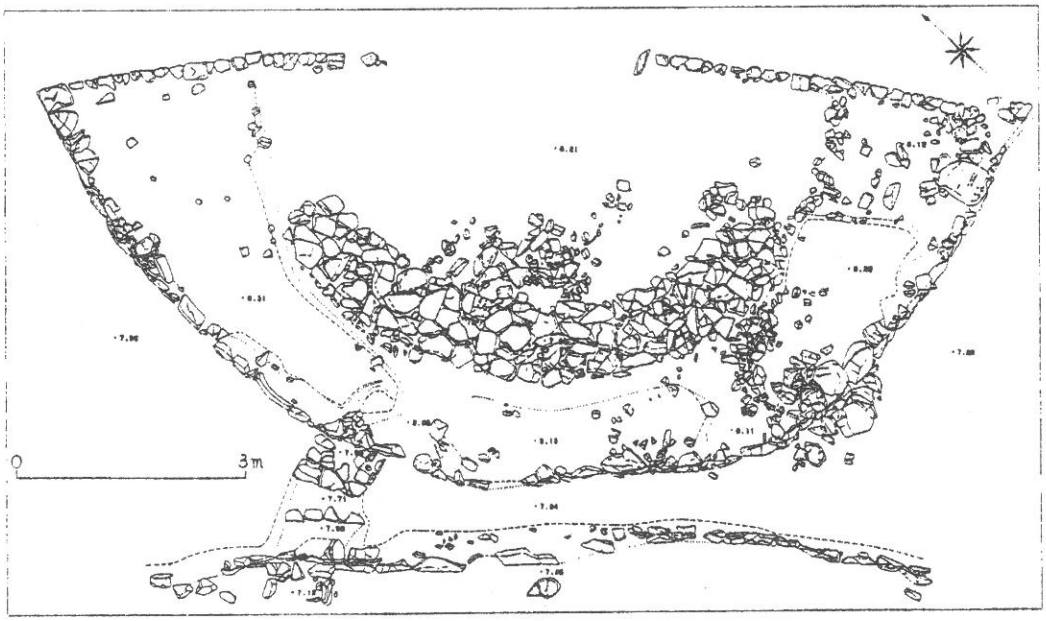
土塁が一段高く盛土された西端部分の空間は、床が玉砂利で敷かれており、この部屋は火薬室であったと推測される。右側壁部分は、石積みが確認されておらず、今後の調査にゆだねられるところである。

（田中栄一）

※福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『第10回発掘調査報告会資料』1995年 より転載



松ヶ瀬２号台場跡平面図



３号炮座実測平面図